私、サイボーグになって現代に戻ってきました

窪まり

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
私、サイボーグになって現代に戻ってきました

【Ｎコード】
Ｎ８２６１Ｚ

【作者名】
窪まり

【あらすじ】
５年間、かずみと同棲した未来から来たアンドロイドにあうため自分の肉体を冷凍保存して２００年後の未来に行った。彼女はサイボーグとして蘇った。２００年後の世界は、どんな社会なのか不安と期待が入り交じる。だが、５年間、同棲したアンドロイドの正体を知って驚いた。そして、２１世紀初期の現代に戻る。百合描写がありますので、苦手なかたは、移動してください。

私、未来に行きました。

かずみ２０歳は、２００年後の未来から来たアンドロイド１９９Ｊｐと５年間、同棲し百合関係を続けた。そして、再び時空の歪みが生じて、アンドロイド１９９Ｊｐは未来へ帰ってしまった。

かずみは２５歳になり、はじめて性風俗デビューすることになった。そして５年後、３０歳になったとき、奇跡的に宝くじで１億円が当たり、自分の身体を冷凍保存するために渡米した。

大量の睡眠薬を飲み自殺した。遺書には、「私が死んだら、わたしの身体を２００年後の未来になったら、再生できるように冷凍保存してほしい」という内容だった。

かずみが再生されたとき、冷凍保存のため脳だけしか再生できる細胞がなく、身体全体が人工有機？で構成されたサイボーグとして蘇った。

今までアメリカの某ホテルの部屋で寝たと思ったら、目が覚めたとき、周囲は見たことないような風景だった。周囲には見たことがない白い箱（たぶん機械）がたくさんあり、空中にいくつものスクリーンが映し出された。かずみは自分は、ついに念願の２００年後の未来に来たと喜んだ。

「アンドロイド１９９Ｊｐに会いたい」と心の中で願った。

周囲にはいろんな人種の人たちが、肌に密着するような白い服を着ていた。現代人から見れば、異様なデザインである。

かずみは、ある程度までなら英会話でき、英語も聞き取れるが、かずみの周りにいる人は、なに言っているのか理解できなかった。

「おっはー。ようこそ」と英語で話しかけられた。

褐色の肌の女性が、かずみの手を取った。そしてゆっくり立ち上がった。

「あの今は西暦何年ですか？」と英語で訪ねた。

褐色の肌の女性は、かずみの英語が理解できないので、もう一度、ゆっくり話しかけて欲しいような雰囲気がした。褐色の肌の女性は、ペラペラした薄い紙ディスプレイをもってきて、指で質問を書いて欲しいような仕草をした。

かずみは、指で英語で「今、西暦何年？」と書き、それを呼んで褐色の肌の女性は、ディスプレイに「西暦２１９７年」と書き記した。

「やったー！ついに未来に行けた」

２００年近く死んでいたので、全く夢がない睡眠のようだった。アメリカの某ホテルのベットで寝たと思ったら、目が覚めたら、一瞬で周囲は、理解できない物ばかりだった。

「私、アンドロイド１９９Ｊｐに会いたい。どこにいるの？」と尋ねたら、

褐色肌の女性は「あなたがアンドロイド１９９Ｊｐです」と言われた。

実は、かずみそのものがアンドロイド１９９Ｊｐになっていた。

かずみの希望どおりに、かずみの身体は冷凍保存され、２１９７年のある日、理想的な身体として蘇った。身長はやや低く（１７０センチから１６５センチ）なり、顔も女っぽい顔になった。髪の毛が長くなり、ある日本人アイドルの顔をモデルにした顔になっていた。とてもかわいらしい顔になっている。

全身を映す鏡をみて、自分の姿を見て、うっとりした。

「肌がすべすべ。ツルツルしている。この辺にいた女子高生よりもきれい。スタイルも顔も理想的。まさに芸術！」と喜んだ。

元々スタイルが良かったが、もっと理想的な身体になり、バストが大きくなり、ウエストがより細くなった。顔とスタイルが変わった。

何か違和感を感じると思ったら、自分の身体に性器も肛門もないことに気がついた。

かずみは、そのことについて悲しんだ。性器がないことはオ〇ニーができない。

肛門がないから食事もお酒も飲むことできない。

あの５年間の生活は、実は自分自身とのエッチな行為だったと思った。

「あの５年間は、私そのものとエッチな事を毎日していたのね。どうりで私の趣向を上手く読み取っているから、良くできたアンドロイドだと思ったが、実は私の脳で動くサイボーグだったのね」

「遅かれ早かれ、再び２１世紀の私が住んでいたアパートの部屋に

戻る。私、自身との百合関係が始まるのね」

「でも、食事もできない。お酒も飲めない。性器がないからオナニーもできない。これから私はどうするの？」と悩み、

褐色肌の女性に、食事とお酒について尋ねた。

彼女はペラペラした紙ディスプレイを持ってきて、「逆に無駄が省けて合理的。食事をしたいと思ったら、サーボーグ用のガムを噛めばよい。脳に美味しい味と満腹感をあたえるから。お酒が飲みたければ、コンローラーでお酒飲んだ気になれる」と２１世紀の英語、褐色肌の女性にとっては古い英語に訳された文字がでてきた。

かずみは日本語で自由に会話したいと思った。

少し恥ずかしそうな表情で、かずみは褐色肌の女性に尋ねた「オ〇ニーは、どうしたら良いの？」褐色肌の女性は「時間の無駄。もっとこの社会には楽しいことがある。でも、どうしても性的快感を感じたいなら、バーチャルリアリティセンターに行けば脳を刺激して、オ〇ニーよりも気持ち良いことができる。また、なりたい自分になれる」と言った。

いずれ、もとの私のアパートに行く宿命がある。確実に、私自身との再会がある。未来社会の生活に慣れる必要がある。どんな社会なんだろうか期待と不安が入り交じった。

私、バーチャリアリティを体験しました

２２世紀の未来社会の娯楽は、バーチャルリアリティである。個人の妄想をリアルに体験することができるのである。

だが２２世紀の社会では、人間は異様な服装をしていた。そして、アンドロイドや全身がサイボーグになった人は、街中でも全裸である。かずみは何でもいいから服を着たいと思う。全裸で歩き回るには、恥ずかしい物があるから、せめてショートパンツとタンクトップが着たいと思った。

でも、頻繁に全裸の美女や美男が歩き回っているので、次第に目が慣れてしまった。

バーチャルリアリティセンターへ歩いて行ったが、どんなに歩いても足が疲れない。外はとても寒く、他の人は白いつなぎのような服装であるが、息が煙のように凍っている。零下１０度である。

全身をサイボーグにした人には、なぜ服が必要無いのか、それは感覚遮断を意識的に行うことができるのである。だから寒さを全然感じない。かずみも、不快な感覚を意識して遮断することができるのである。

かずみは、サイボーグ食を食べた。カレーライスを食べたいと思ったら、サイボーグ食から美味しいカレーの味がしてきた。口の中が温かく感じる。サイボーグ食は本来は脳だけに栄養と酸素を送るだけの食品だが、味覚を自由にコントロールすることができるのである。カレーライスの味だけでなく、考えるだけで、ビーフシチューの味もするし、何度も噛むほど、満腹感を感じるのである。

歩きながらサイボーグ用のガムを噛みながら、バーチャルリアリティセンターに到着した。

かずみは、未来社会は高いビルがあって、そら飛ぶクルマが空中を移動しているのを想像したが、２２世紀末の未来の風景は、ほとんど低いビルがあり、白っぽい建物が多く、やたらと樹がたくさん生え、寒い季節なのに、きれいな花が咲いている。造花だと思ったら、本物の花なのである。

かずみが未来に来てから3ヶ月後、１２月の未来都市は、とても寒かった。

全裸で歩くと、変な感覚だが、かずみの他にも全裸の美男・美女がいるので、次第に慣れてきた。

早速、アイドル顔になった私（アンドロイド１９９Ｊｐ）、かずみはロリっぽい女の子とエッチな事をすることを体験した。
周囲の景色が、２１世紀初期のかずみが住んでいた街の風景になり、そこで自分の妄想に集中すると、自分が想像したロリっぽい顔の美少女とであった。

「どこかラブホテルでもないかな」と考えたら、周囲は急に現代風のラブホテルになり、早速、ロリぽい顔の美少女の服を脱がせ、エッチな事をした。

それを１６時間連続で行うと、急激な睡魔に襲われ、全く夢のない睡眠に至る。

気がついたら、かずみはバーチャルリアリティセンターの床で、３時間ほど熟睡していた。全く夢が無い、とても深い眠りだった。

かずみは「確実に、私はアンドロイド１９９Ｊｐとして、２０歳のときの私（かずみ）のところに戻る運命」だと思った。

私、砂糖で、できた美少女人形なの（前書き）

しばらく、書き込んでなかったので、短くても連載を続けたいと思います。
今後もよろしくお願いします。

私、砂糖で、できた美少女人形なの

かずみが会いたがった、アンドロイド１９９.ｊｐは、かずみ自身であった。

かずみは、数年間、むさぼるようにサイボーグ食を食べ続けた結果、酸素と糖分を供給しない状態で５年半もつような身体になった。だから水中でも真空中でも生活できる身体になったわけである。

突然、火星開発事業の仕事のオファーがあったとき、自分の運命が変わると思って、残念に思った。
いつまでたっても時空の歪みが起きないからである。

月面や火星の場合、人間が行く必要がなく、ほとんどがアンドロイドか全身サイボーグ化した人のみである。
火星を数万年後には、地球と同じ環境にするために、火星開拓と称して、火星の表面に氷点下でも育つ藻を植える作業を行うことである。

サイボーグになった、かずみは、月面基地に向かうロケットに乗ろうとした直前、大量の酸素と脳の栄養である糖分を補給していた。
そのとき時空の歪みが生じた。

太陽よりも明るい光が差し、かずみはそこに吸い込まれた。

そして、２００６年の自分のアパートの窓に到着した。全く謎である。それも都合良く、自分の部屋に行くなんて。

そこにいるのは、２０歳の　かずみである。
サイボーグになった、かずみから見ると、とてもおとなしそうな少年のように見えた。

自分で自分の顔をみるのは変な気分である。それも写真でも鏡でもなく、直に自分の顔をみるのであるから。

「わたし、５年半分の酸素と糖分を補給したまま自分が住んでいた部屋に戻ったわ」と思った。

「わたしの本当の顔って、とてもボーイッシュ。なんだか、とてもおとなしそうな少年そのもの」

そう思ったとき、２０歳のかずみが、いろいろ話しかけて来たが、無意識に「私の稼働時間は、５００７５日」としゃべった。

目の前には、飲み物や食べ物があるが、それを口に入れる訳にいかない。

食べられるのはサイボーグ食のみである。

５年半分の酸素と糖分では、身体のほとんどを占めている。それが無くなれば皮だけスカスカになる。

『私の身体は、酸素と糖分でできている動く人形なんだ』と思った。

『砂糖で、できた美少女人形なんだ』物理的に考えればそう思う。かなり密度が高い未知の物質でできていると考えられる。現代科学では解明できないもので、アンドロイド１９９Ｊｐはできている。

そして、２０歳のかずみによって、お風呂に入れられ、そして２０歳のかずみに愛撫だれた。

「なんだか、とても大人しそうな男の娘に抱かれているみたい。２０歳の、わたしってこんなに身体が硬い。だから性風俗をしても、リピーターが来ないわけだわ」と思った。胸の膨らみもほとんど無く、身体には、ほとんど弾力がない。抱かれても、まるで痩せている男性に抱かれたような感覚である。

初めて自分で自分の身体を抱かれた感覚を体験した人類最初の人間、それが、サイボーグになった、かずみである。

私、なんだか男の娘と一緒にお風呂に入っているみたい

サイボーグになった、かずみは現代に戻り、２０歳のかずみとお風呂の中で抱き合った。

２０歳のかずみは、サイボーグになった私に口づけをした。

そのとき、かずみの敏感なところに指で触った。

「ああん・・。」２０歳のかずみはあえぎ声を出した。

２０歳のかずみを抱かれても、肋骨がダイレクトに感じる。心臓の音が伝わる。お尻は小さい。身体全体に弾力がない。

２０歳のかずみは、サイボーグになって現代に戻った私そのものである。

サイボーグになった私は、２０歳の私の胸で感じさせた。そして、恍惚と思えるような表情をしていた。

２０歳の私の太ももは、肌がきれいだが、弾力が足りない。太ももをさすった。

さすられることで、２０歳の私は、性的に感じた。

お風呂のお湯がぬるくなり出した。

２０歳のかずみに教えてもらことなく、追い炊きのスイッチを押して、お風呂のお湯を温めた。

時間がたち、２０歳のかずみはお風呂の湯船の中で寝てしまった。

サイボーグになった私を愛撫し続けて、２時間がたった。２０歳のかずみは、居心地の良い疲労でお風呂場で寝てしまった。

そして、２０歳のかずみが目が覚めたとき、サイボーグになった私の太ももを、真っ先に見えるような体制にした。

サイボーグになった私は、次の行動が予測できた。

お湯からでて、いきなり抱かれた。サイボーグになった私の胸の感触に感動した。

そして、サイボーグになった私は、かずみの感じやすいところに指を入れて、すこしでも早く○液をだそうとしたが、サイボーグの私は、次の行動が読めた。

一緒に布団に入り、レズプレイを続けるつもりだった。

気がついたら、早朝の４時になった。

２０歳のかずみは、サイボーグとして現代に戻った私に対して、「こんなに気持ち良い思いをさせてくれて、ありがとう」と言った。

一日中、サイボーグとして現代に戻った、かずみは、２０歳のかず

みと、一緒に、疲れ果てるまで、レズプレイをすることになった。

私、「メイ」と名付けられて

２０歳の　かずみは、急遽、会社に休むために連絡をした。風邪で休むことにした。

２０歳の　かずみは、未来から来た私に、何か良い名前がないか考えた。今は西暦２００６年１２月、もうじきクリスマスの時期である。ブラウン管式の小さなテレビを、２０歳のかずみがつけると、幸せそうなカップルがでてくるが、２０歳のかずみは、未来から来た私と一緒にいるだけで幸せなのである。

「ねえ、わたしあなたの名前を考えたの。メイちゃんというのはどうかな？」「もし、気に入らなかったら、別の名前でも良いけど」と言われ、「私のこと何でも呼んでも良いわ」と答えた。

２００６年１２月初旬、私はメイと呼ばれるようになった。

「でも、メイちゃんは、身元不明の女の子だからバイトもできないし、今の私に良いコネがあるわけでもないし・・・。でも、洋服代と電車賃は私が払うから。で、全然、食事もできないの？」

メイと名付けられた私は答えた「はい。私、全然、食事することができないです」と言った。

そのときメイと名付けられ次に何をするのか予測（？）できた。というか、１０年前の記憶をたどれば解るのである。

デパートのランジェリーショップに一緒に行くことである。

午前１０時、デパートが開店した。「ねえ、かわいらしいブラを買いましょう」とメイに話しかけた。

メイとは、未来から戻った私、かずみの名前である。

たしかに、１０年前のかずみの服は、胸のところが窮屈である。

１０年前のかずみは、ショートカットでボーイッシュでいかにも元気がある少女みたいだけど、内心はとても気が弱い女である。

かずみは、長ズボンのジーパンに黒のジャケットをはおり、その上に黒に近い灰色のジャンバーを着ていた。

メイは、感覚遮断があるので、どんなに寒くても平気だが、周囲から不自然に思われないために、かずみのジャンバーを着せて膝丈のスカートを穿いた。押し入れの中を探して、長い間眠っていた、女の子らしい色彩とデザインの洋服である。

遠くから見ると、男女のカップルみたいだった。

でも、近くで見ると、ボーイッシュな女と、アイドルみたいな女の子のカップルである。

私、久しぶりにママと会った

クリスマスイヴの日、かずみの母親がアパートに訪れた。

「かずみ。元気してた」

「ママ、今日はクリスマスイヴなのね」

「かずみに、ケーキとプレゼントを持ってきたの。で、窓際にいる、かわいいらしい女の子は誰なの？」

「この子、私の親友、メイちゃんです」と、かずみは元気な声で答えた。

メイは、かずみが未来に行ってサイボーグになって現代に戻った女の子。

２０歳のかずみの母親は、メイを見て「とてもかわいい。良い親友ができたね」と言った。

「ねえ、かずみ　お正月には、実家に帰って、ゆっくりしたら。それから、メイちゃんも来てね」

メイは、数年ぶりに、母親と再開し、感激して涙を流した。

「メイちゃん。どうしたの？」

メイは、どう説明すればいいのか判らなかった。

「わたし変なこと言ったかしら」かずみの母親は、困惑した。

メイから見た母親は、かずみが３０歳になって最後に見たときと比べて、とても若く見えた。

かずみもメイが何故泣いたのか理解できなかった。

メイは有機物で出来たサイボーグだが、水分だけは補給できるのである。

「ちょっと、お水が飲みたい」メイは、かずみに頼んだ。

メイは、かずみの前で水を飲み、また、涙を流した。

「メイちゃん。今日はちょっと変だわ」

メイは気を取り戻し、涙をタオルで拭いて、かずみの母親に、「かずみさんの実家に誘ってくれることを、光栄に思います」と言った。

かずみの母親は、メイが来ている服が、どこかで見たことある服だとおもった。

「ねえ、この服、かずみが来ていた服ではないの？」

メイは、女の子らしいちょっとピンクがかったワンピースを着ていた。

かずみ「わたし、こうゆう、女の子らしい服が似合わないから、メイちゃんに、今、着せたの」

かずみの母親は「メイちゃん。とても似合うわ。かずみも、自分の個性に合わせて、いい女になりなさい」と言った。

かずみ「ごめん、ごめん、ママ、遠いとことから来たのね。お茶を出すのを忘れて、ごめんなさい」

「かずみ、そんなに気を使わなくても良いわよ」

かずみは、「ママ、お茶　何にする？紅茶、それとも緑茶？」

「かずみ、何でも良いわ」

かずみは、久しぶりに来た母親のために、とっておきのアップルティを出した。

「メイちゃんも、お茶飲んだら」と、かずみが言うと、

メイは、「わたし、お茶飲めないの」

「メイちゃん遠慮しないで」と、かずみは言ったが、かずみは、メイがアンドロイドであることを思い出し、「メイちゃん、気が向いたら飲んでね」と言った。アンドロイドだから、かずみの母親が持ってきたケーキは食べられないと思った。

かずみは気を利かせ「ケーキは、後で良いわね」と言った。

かずみの母親とは、まるで友達みたいな親子だった。

かずみと母親と楽しい団らんの時間が終わり、かずみとメイは、母

親を駅まで送った。

「ママ、良いお年を！」

「かずみも、良い年を」

かずみの母親は、駅の改札口に入った。

かずみが、なぜ高スペックな女になったのか

かずみとメイは、恋人のように手を握り合いながら、身体を密着しながら自分のアパートに戻った。

かずみの口から、白い息がでるが、サイボーグとして現代に戻ったメイは、ほとんど口から白い息がでない。かずみは、いかにも男性が着るような黒っぽい服装で、メイは赤茶色のチェック柄のロングスカートに、暖色系のジャンバーを着ていた。遠くから見ると男女のカップルに見える。

「ボク、いや、わたし、こんなかわいい子と一緒になれて幸せ」かずみの一人称は「ボク」だが、２０歳過ぎているので、なるべく一人称は「わたし」というように直している。

「わたしのアルバム見ない」とメイに話しかけた。

アパートに向かう道で、かずみは自分の少女時代の話しをした。当然、自分はビアンであることも告白した。

メイは、かずみが３０歳の時に、自分の肉体を冷凍保存して、未来から戻ったサイボーグである。だから、かずみが次に何を喋るのか、全て解るのである。メイそのものが、未来のかずみなのである。

かずみの部屋に戻ったメイは、メイの服を脱がせた。それを見ると、まるで芸術のような美しさなので、かずみも服を急いで脱ぎすて、メイを後ろから抱きしめた。そして口づけをした。

「メイちゃん。身体が冷えているね。ボクが温めてあげるよ」とき

つく抱きしめた。

メイは、かずみの堅い身体を直に感じた。かずみの肋骨がダイレクトに感じる。メイは、少しきつく抱かれたたので、少し痛く感じた。

そして、かずみが、心地良い疲れに至り、そして、二人とも全裸で布団にはいる前に、かずみのアルバムを二人で見た。

アルバムには、親子3人でキャンプに行った写真が多かった。そして、父親はアウトドアが趣味であり、母はジムに通い、毎日、ジョッキングをしていた。かずみも小学生高学年の時から、運動するのが好きになった。

アルバムには、いかに健康的な家庭だという印象がある。

「ボクのママ、いや、私の母は、とても優しくて何でも相談にのってくれるの」

そして、かずみがなぜ、学力が高くなったのか話した。

「ママは、わたしに勉強をしなさいとプレシャーを全然かけなかった。たぶん、小学校のとき、ママは、わたしになぜ勉強しないといけないか、ママが模範を示してくれたの。ママはいろんな資格を取るため勉強したのが、わたしにとって良い模範だったわ。それに解らないことがあったら、優しく教えてくれたの。そして、徐々に成績が良くなると、褒めてくれたけど、成績が下がった時は、全然、叱らなかった。だから勉強するのが好きになったの」

メイは、かつて自分が、かずみだった頃の記憶があるので、次に、かずみが、何を話すのか全て予測できた。

「ママが作った料理は美味しいし、いくら食べても太らない。身長だけが伸びたの」そして「勉強に関しては、決してプレッシャーをかけて伸ばそうとしないの。やる気がでるまで忍耐強く待っていたの」と話し、

メイは、十数年前の記憶をたどり、かずみに話しかけた。

「かずみさん。良いお母さんに育てられて幸せなんだね」

「いや、それだけではなく、パパも、とても尊敬できる人だわ。ママとパパは、いつも仲良し。いつまでも新婚の夫婦みたい。パパは、滅多に怒ることをしない。でも、躾が厳しいけど、良くできたら褒めてくれるの」と、かずみは語った。かずみは、褒められると伸びるタイプであることを、メイ自身が良くしているのは、メイは、かずみそのものだからである。

「でも、私、一人っ子だから、兄弟が欲しかった。それに、私はとても気が弱いし・・・」

メイは、かずみが将来、両親と別れることを決心するほど、強く未来への願望を持つことを知っていたので、一言だけ忠告した「かずみさん。いつまでも両親と一緒にいるわけではないわ。いつか別れの時が来る。たぶん。だから今のうちに両親を大事にして」と言った。

確かに、かずみを育てることでは、成功した。でも、いずれ近い将来、別れの時がくる。

まだ、メイと出会って一ヶ月もたっていない、かずみが尊敬した両親と永遠の別れを選ぶほど、未来へ行きたいと思い続けること。そして、その強い願望にとらわれる事を知らない。

かずみは、メイが必ず『かずみさん』というので、かずみはメイに「ねえ、メイちゃん。一つだけお願いしたいことがあるが、『かずみさん』でなく『かずみ』と呼んでね」

メイは「かずみ、もしかしたら、わたし、いつまでも一緒にいられないかも知れない。それだけは覚悟してね」それは、過去の自分である、かずみへの心つかいだった。

メイはさらに「もし、わたしが去った後、いろいろと辛いことがあるけど、それに負けないでね」と伝えた。

メイは、かずみの未来を全て知っている。それは、メイが、かずみが未来から戻って来たサイボーグだからである。

かずみは、徐々に一人称「ボク」でなく「わたし」へと切り替えたことに気がついた。

「もう２０歳だもんね。ボクというのも変。大人だし、来年は成人式だし、久しぶりに中学生の時のクラスメートに会うから、もっと成長しなければ」と、かずみは言って、メイと同じ布団の中に入って寝た。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8261z/

私、サイボーグになって現代に戻ってきました

2012年1月6日04時57分発行